



地主喬先生のご逝去を悼む

大槻, 守

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 3:137-137

(Issue Date)

2011-08

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81003384>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003384>



地主喬先生のご逝去を悼む

大槻 守

平成二十三（二〇一一）年二月十七日、療養
かなわず先生は逝去された。まだまだお聞き
たいことが多かった。何としても、あれほど気
にかけていただいていた『香寺町史 村の歴史』
通史編の刊行が今もなお報告できないままで
あることが悔やまれてならない。

ちょうど一年程前のことになる。町史が印刷
できそうになくなった成り行きをたいそう気
にかけておられた。これは原稿が書けなくなった
私のせいだ、申し訳ないといわれ、教育長に新
年度早々には出せるようにしてほしいと手紙を
出したと言われた。後日、教育長から「先生の
せいではありません。これにはいろいろな事情
がありました」という意味の返事があつたと聞
いている。

先生が発病されたのは平成二十一年夏のこと
であつた。癌と告知された時の気持ちは、年報
『香寺町の歴史』第四号に率直に書かれている。
「八十歳を越えようと、人間は天命がいつ尽きて
もよい覚悟をせねばと反省した」とある。私に

は顔を見ると「無理しなさんなよ」と言われた
ものである。この第四号には、町史に書きた
かつたという民俗編の構想が書かれている。こ
れは、先生が執筆された絶筆ともいえる文章で
はなかつただろうか。

先生と香寺町史とのつながりは編纂に着手し
た平成十年にさかのぼる。住民とともに作る町
史、暮らしの変化を記録する町史はどのように
進めたらよいかと思悩んでいたので、町史
のことを説明し、町史編集協力者会議での講演
をお願いした。その年の十二月である。町史の
編集方針に賛意を示されて、演題も町史の構想
そのままに「暮らしの中から歴史を調べる」であつ
た。先生は、香寺町史で「本場に必要なのは、
誰も知らないだろうなということだけを書くの
ではなく、現在誰でも知っていることを取上げ
ることです」と、ユニークな視点で協力者たち
を励まされた。

その後、町史顧問（『村の記憶』）、町史編集
委員（『村の歴史』）として最後までご指導いた
だいてきた。ここではその間の二点だけを触れ
てみたい。一つは町史への女性参加である。男
だけでは衣食住があまり出てこない、厚みのあ
る町史にならないというのが持論だった。そこ
で、女性七人から「女性と村の暮らし」について
聞き取りをされ、年報にその聞き書きを寄せら

れた（年報『ふるさと香寺』第五号）。だが、
女性の参加は編集室の力不足で最後まで実現で
きず申し訳のないことであつた。

もう一つは先生の構想の中心にあつた年中行
事である。協力者の調査でも先ず手を着けたの
が祭り・盆・正月というハレの行事だった。先
生はこの報告を読んで、村の精神生活の移り変
わりがここにみごとに表れていると評価された
（調査報告2『ムラの暮らし』）。そして、『村の歴
史』通史資料編ではこうした年中行事を映像化
して付録につけてはどうかと提案された。これ
は幸い町内のビデオカメラマンの協力を得て撮
影することができ、自治体史ではあまり例のな
い試みが出来たと大変喜んでいただけだ。

『村の記憶』が完成したとき先生は、この手
作りの町史は皆が知恵を出し合い、助け合った
から完成した、こんな素晴らしいことはない
と喜ばれた。その上で、この町史に込められた香
寺町の魂を次の世代に伝えてほしいと期待さ
れた。現在、私たちは神戸大学地域連携センタ
ーと提携しながら少しずつその方向へ仕事を進め
ているとご報告し、今はただ、先生のご冥福を
祈るばかりである。